

日本統計学会会報

NO.114 / 2003. 1.20

発行——日本統計学会
東京都港区南麻布4-6-7 統計数理研究所内
〒106-8569 Tel 03-3442-5801 Fax 03-3442-5924
編集責任—國友直人（理事長）／藤澤洋徳（庶務理事）
山口和範（広報理事）／信久 洋（広報理事）
振替口座—00190-2-61361
銀行口座—みずほ銀行広尾支店普通 1092212番

JAPAN STATISTICAL SOCIETY NEWS

目次

1. 巻頭随筆：「会員による会員のための連合大会」岩崎 学，柴田里程，倉田博史... 1	8 第4回IASC-ARS釜山大会に出席して・鈴木晶夫...13
2 2003年度統計関連学会連合大会企画募集2003年度連合大会企画委員会... 3	9 新刊紹介「情報をよむ統計学」.....三浦由己...14
3 第71回大会へのお誘い.....和合 肇... 4	10 日本統計学会ロゴマークの募集.....15
4 林知己夫先生を偲んで.....馬場康維... 4	11 統計教育委員会からのお知らせ・渡辺美智子...16
5 シリーズ：統計学の現状と今後..... 6	12 日本統計学会会員用メーリングリストについて中野純司，藤原文史...16
5.1 「データ科学専攻の設立」..... 6	13 日本学術会議第19期会員候補者選挙延期のお知らせ17
5.2 「散布図と相関図」..... 8	14 韓国統計学会誌定期購読のお知らせ・.....17
6 研究部会最終活動報告.....11	15 2002・2003年度理事会議事録・.....18
6.1 非線形時系列解析と金融工学II.....11	16 会合案内.....20
6.2 統計分野におけるインターネットの活用...11	17 会報No.113の訂正とお詫び.....20
7 日本統計学会誌（和文誌）への投稿の呼びかけ加納 悟...13	18 事務局から.....21

日本統計学会会長選挙開票報告

本学会細則第4条による2003・2004年会長選挙の投票を12月15日で締め切り，12月17日に日本統計学会事務局において開票した結果，藤越康祝氏が当選しました。

2003・04年会長選挙管理委員会

加藤 剛，金藤浩司

巻頭随筆

1 会員による会員のための連合大会

2003年度日本統計学会企画理事

岩崎 学（成蹊大学工学部）

柴田里程（慶應義塾大学理工学部）

倉田博史（東京大学教養学部）

日本統計学会2003年度年次大会は，2002年度と同様，応用統計学会，日本計量生物学会との連合大会として，2003年9月2日から9月5日まで名城大学天白キャンパスで開催される予定です（9

月2日はチュートリアルセミナーなど，研究発表会は9月3日から）。また，日本行動計量学会の年次大会も，連合ではありませんが同じ時期に同じ会場での開催となる予定です。

2002年度大会は、関係各位のご努力で連合大会として成功を収めました。初めての試みということで若干の戸惑いもありました。2003年度大会はさらにより大会となるよう「融合と発展」を目指して、連合大会のメリットを最大限に生かした大会としたいと思っておりますので、会員の方々の積極的な参加をお願いいたします。

第一にお願いしたいことは、会員からの企画セッションの提案です。これまで日本統計学会では共通テーマと一般講演という形でセッションを組み立てて参りましたが、共通テーマという形式が必ずしもうまく機能していないのではないかと反省のもと、2003年度大会では、大きくわけて企画セッションと一般セッションという2つの形式をとることに致します。

企画セッションは、連合大会参加の各学会の会員からの提案を受け、連合大会企画委員会において調整の上、オーガナイザーに責任をもって組織していただくセッションで、あるテーマに関して深く掘り下げた講演を基に活発に討論したいといった明確な目的をもったセッションです。そのため、プログラム編成上も、余裕をもった講演時間と討論時間がとれるよう配慮いたします。なお、この企画セッションは基本的にオーガナイザーによる招待講演セッションですが、これ以外に特別講演セッションとして単一の講演と討論からなるセッションのご提案も受け付けますので、併せてご提案ください。

会員の皆様をお願いしたいことは、どのような企画セッションが望ましいかという活発な提案を寄せていただくことです。もちろん具体的に「こういう講演者と討論者でこのテーマで企画セッションを組織したい。自分がオーガナイザーとして責任をもって運営する」という提案でも結構ですが、「こういうテーマのセッションがあればいい」という漠然としたアイデアでも結構ですので、是非ご提案をお寄せください。提案がなるべく生きるよう最大限の努力を致します。提案の締め切りは別記のように3月10日とさせていただきますが、早ければ早いほど実現の可能性は高まりま

す。

一般講演に関しても、活発な議論が展開されるよう、なるべく近いテーマが同一のセッションに来るよう細心の注意を払ってプログラム編成を行います。そのため、これまでのようにキーワードに従ったセッション分けではなくなる可能性もありますので、この点あらかじめ御了承ください。また、内容に合ったプログラム編成を的確に行うため、これまで報告集原稿と同時に提出していただいていた300字の「報告要旨」を一般講演の申し込み時に提出していただくことも考えております。なお、講演申し込み及び報告集原稿の締切の詳細は次号会報（2003年4月発行予定）でお知らせします。会員の皆さんの便宜を図るため、講演締切はなるべく遅く（6月中）、プログラムの確定はなるべく早く（7月中）致します。

また、今回新しい試みとして、コンペティションセッションも企画しております。主に研究活動を始めてまだ日の浅い会員を対象に、レベルの高い報告内容を的確に聴衆に伝えるよう努力していただきたいとの趣旨で開催するセッションで、連合大会参加会員の誰でもが出席できる時間帯にこのセッションを設定し、すべてに出席した会員による投票で、最優秀賞1名、優秀賞数名を授与いたします。もちろんそれなりの副賞も検討しております。授賞の詳細は4月の会報でお知らせできることとおもいます。テーマは特に限りませんので該当の会員は、なるべく一般講演ではなくこちらのほうにお申し込みください。より多くの会員に自分の研究を理解してもらえるチャンスです。また、各講演に対して別途10分程度の討論時間も確保する予定ですので、今後の研究に役立つようなコメントも多数得られることでしょう。賞を取れるかどうかは別にしても、このような機会を積極的に利用していただくことが、将来の展望も大きく開くことになるに違いありません。9月の学会当日を目指して今から準備していただいても早すぎないでしょう。

さらに、これまで通り、9月2日にはチュートリアルセミナーと市民講演会を企画しております。

す。こちらに関しても、ご意見がありましたら是非企画委員までお伝えください。

2003年度連合大会は、参加された会員の誰もが「参加してよかった」、「連合大会ならではの収穫があった」と思って帰途につかれることを願って企画しております。参加してよかったという中には、研究上有益な情報が得られた、議論ができた、今後の展望が開けたなどさまざまなものがあると思いますが、せっかく集まるからにはやはり人間同士の触れ合いやコミュニケーションを深めることも重要な要素であると考えます。そのような場となるよう、企画委員も努力致しますが、会員各位におかれましても、これまで接触の少なかった分野の方々との積極的なコミュニケーションを深める努力を是非お願いいたします。

その第一歩は、企画セッションに対する提案であり、コンペティションセッションに対する参加です。また、連合大会は参加各学会の枠を越え、いままでなかった研究上の交流、人間の交流を図る絶好の機会です。そのためにはさまざまなセッションも参加学会の枠を越えた編成をしたいと思っておりますので、会員のみなさんのご理解と積極的な参加をお願いいたします。

学会はだれのためでもありません。会員ひとりひとりのためのものです。学会をよくするのも悪くするのもそれぞれの意識と行動にかかっています。2003年度大会はいま企画が始まったところです。みなさんの積極的な提案をお待ちしております。どんな提案でも結構です。気軽にお寄せください。

2 2003年度統計関連学会連合大会企画募集

2003年度連合大会企画委員会

2003年度連合大会企画委員会では通常の一般講演とは別に企画セッションを企画しています。企画セッションでは

- (1) 特定のテーマについての複数の講演と討論
- (2) 内外の統計学者による1時間程度の特別講演
- (3) その他、学会参加者にとって有益なテーマに関する特別セッション

などを考えています。

以下の要領で企画セッションでの提案を広く募集します。ご自分がオーガナイザーとなりセッションを構成するという案でも、また、こういうセッションがあればいいという提案でも構いません。ご提案をお寄せください。

応募期限：2003年3月10日（月）必着

応募宛先：2003年度連合大会企画委員会委員長
岩崎 学

〒180-8633 東京都武蔵野市吉祥寺北町3-3-1

成蹊大学工学部

FAX：0422-37-3871,

E-mail：iwasaki@is.seikei.ac.jp

（郵便、ファックス、電子メールのいずれでも構いません）

・提案内容：確定でなくても構いません。

- (a) ご自分がオーガナイザーとなりセッションを構成する場合には、以下の各項目をお書きください。

- (a.1) セッションのテーマとねらい

- (a.2) オーガナイザーの氏名、所属、連絡先（住所及びメールアドレス）

- (a.3) 予定する講演者と講演題目（仮題）ならびに討論者

- (a.4) セッションに必要な時間

- (b) 取り上げて欲しいテーマがある場合には以下をお知らせください。

- (b.1) セッションのテーマとねらい

- (b.2) オーガナイザーとしてふさわしい方の氏名と所属

- (b.3) 講演者としてふさわしい方の氏名と所属

・照会先：上記岩崎までお願いします。どんなことでも構いません。

3 第71回大会へのお誘い

連合大会実行委員長
和合 肇（名古屋大学大学院経済学研究科）

来年度の連合大会は、本年度と同様に日本統計学会、応用統計学会、日本計量生物学会との連合大会に、日本分類学会と日本計算機統計学会が協賛するという形で9月2日（火）から5日（金）まで名古屋市内の名城大学天白キャンパスで開催されます。今回は、日本行動計量学会も連合大会と同時期に同じ場所で大会が開催されます。したがって、多くの幅広い話題にふれることができるよい機会であると同時に、各学会に参加される多くの統計学研究者とふれあうことができ、これを機会に新しい研究が生まれることが期待できます。名城大学天白キャンパスは、名古屋駅から地下鉄でおよそ20分の名古屋市内南東部の文教地区に位置しています。最寄の地下鉄駅は鶴舞線「塩釜口」ですが、そこから徒歩約8分で会場のある大学キャンパスに着きます。会場となるのは、平成14年12月7日に竣工したばかりの共通講義棟です。1階から4階までのフロアに、14の講義室（うち5つの講義室は収容人員300人以上）と12の演習室があり、連合大会と日本行動計量学会が同

時に大会を開催しても十分対応が可能です。名古屋地区は学会員の所属が分散していることもあり、名城大学の他、中京大学、南山大学、名古屋大学、名古屋市立大学、名古屋工業大学に所属するメンバーが集まって、多数の方々の参加を願いつつ、大会の成功のため準備を進めております。

名古屋には著名な観光地は多くありませんが、有数の産業集積地としてユニークな産業文化施設を有しています。たとえば、会場の名城大学から20分ほどでトヨタ自動車本社のある豊田市まで行くことができ、トヨタ会館やトヨタ鞍ヶ池記念館を見学できます。名古屋駅近くのトヨタグループ発祥の地にはトヨタ産業技術記念館があり、そのすぐ近くには日本陶器のギャラリーと博物館を兼ねた「ノリタケの森」があります。また名古屋市と豊田市に隣接する瀬戸市は瀬戸物で知られる陶磁器の産地ですが、この近辺には愛知陶磁資料館をはじめとする文化施設があります。大会での活発な研究活動と共に、名古屋の街並みと産業文化の風土に親しんでいただけたら幸いです。

4 林知己夫先生を偲んで

馬場康維（統計数理研究所）

平成14年8月6日午前8時43分、元統計数理研究所所長、統計数理研究所名誉教授の林知己夫先生が、心不全のためご逝去された。享年84歳。平成13年9月に開かれた日本行動計量学会の大会直前に入院され、その後、入退院を重ねられた。平成14年5月、6月の行動計量学会のシンポジウムでは講演者、指定討論者としてお姿を見せられていたが、ついに不帰の人になられてしまった。先生は、日本統計学会の評議員を多年勤められ、昭

和60年1月から昭和61年12月には日本統計学会会長に就任されている。また、昭和60年7月から3年間日本学術会議会員を勤められるなど、我が国の統計学の発展に貢献されている。戦後日本の統計学の紛れもないリーダーの一人であった先生が他界され、我々は大きな柱を失った。誠に残念でならない。

林知己夫先生は昭和21年に統計数理研究所に研究員として入所し、その後、第3研究部、第2研

究部長を歴任され、昭和49年から12年間統計数理研究所の所長として研究所の大学共同利用機関への転換、総合研究大学院大学の創設などに尽力された。この間に、様々な学会の創立にも深く関わっておられ、日本計量生物学会初代会長、日本行動計量学会初代理事長などを勤められている。所長退官後も渋谷に事務所を構え、現役で研究を続けておられ、若い研究者の励みになっていた。IFCS（国際分類学会連合）の会長も勤められ、平成8年の神戸でのIFCS96では組織委員長をなさるなど、国際的にも幅広く活動されてきた。

私は先生が統計数理研究所の所長になられた年に統計数理研究所に入った。折にふれて、戦後日本の統計学の歴史を作った一人である先生の研究や、戦後の統計学の研究の発展の経緯などを伺うことができ、多くのことを学ばせていただいた。先生の研究は常にデータに基づいている。データに基づく科学的な現象分析がテーマであった。データがなければどうやってデータを取るかを考え、解析に必要な手法の開発を考える。道具がなければ道具を作るというのが先生の発想であったようである。分析したい現象、推測したい事柄がはじめにあり、データの獲得や手法や道具を揃えることの全体を一つの研究と考えておられた。こういうポリシーから数量化理論が生まれたものであろう。「仮釈放」についての共同研究で後に数量化II類と呼ばれる質的データによる判別分析の方法が考案され、「日本人の読み書き能力調査」において質的データによる重回帰分析に対応する数量化I類、「国鉄保線員調査」においてソシオメトリー表現のための数量化IV類、デザインの研究の中でパターン分類のための数量化III類が誕生した。1940年代後半から1950年代にかけてのことである。ベンゼクリのコレスポネンスアナリシスが1970年代に登場したことを考えると、敗戦から間もない日本でこれだけのものが完成していたことは世界に誇れるものである。

先生の研究は次々に発展する。サンプリング理論の研究、動く動物個体数の推定法の開発、日本人の国民性の研究、意識の国際比較の研究、それらを踏まえ、日本人論等々、優れた研究を發展させておられた。近年は「データの科学」を提唱され、さらに新しい概念の創設を試みておられた。

先生にとっては何ごとにも研究の対象であったようである。平成13年の入院の際、お見舞いに伺ったところ、「自分が入院してみて気付いた。病人は氣力がなくなっているし、直ることに関心が行くので、調査票に書いてあることなど関心が持てない。病気の人を対象に調査をするときの方法を考える必要がある。」と言う意味のことをおっしゃっておられた。また、ご自分のための治療法や薬にも関心がおありで、「やはり多次元的にとらえないといけない。」と強調されていた。

林先生はそのスケールの大きさと志操の高さから多くの人を魅了しつづけた。外国、特にヨーロッパの研究者たちにも良く知られた存在で、国際会議で色々な方から「林は元気か」とよく声をかけられた。

平成14年12月にプサンで開かれたIASCのアジア地域大会で、統計学の将来が話題になった折、司会をしていたIASCの会長のLee Jae Chang教授（高麗大学）が統計学が存続していくためには、故林先生が「データの科学」を提唱されたように、新しい概念を次々に提唱していかなければいけないという発言をされたことが思い出される。

先生を知る人々が林先生について語るとき、それぞれが異なるイメージを持っているようである。林先生の人格の奥深さとスケールの大きさからその一部分をとらえてそれぞれの林先生を心の中に持っている。亡くなられて、改めて先生の存在の大きさを思う。奥多摩の山中にある先生の墓石には、先生の筆になる“俱會一處”（みんなひとつとところであうの意）と言う佛語が刻まれている。ここから先生のご冥福をお祈りしたい。

5 シリーズ：統計学の現状と今後

5.1 データ科学副専攻の設立

鎌倉稔成（中央大学理工学部）

中央大学では平成15年度4月より、データ科学という領域を理工学研究科の中に副専攻として設立することを予定している。データ解析の基礎理論だけでなく計算機志向型のデータ解析についても体系的に学習し、データ解析の専門家を養成することを目標としている。ここでは、この副専攻が設立の概要・ねらい、および授業科目等について紹介する。

（1）設立の概況・ねらい

データから意味のある情報を抽出して知識を獲得する、データ解析の手法は、近年の肥大化するデータ社会において、あらゆる分野の標準的な解析ツールとなりつつある。データ解析で得られた情報・知識は工学、医学・薬学、農学、生物学の理系分野にとどまらず、経済学、心理学、文学とその計量分野を広げている。データ科学副専攻では、こうした様々な分野にまたがるデータ分析のための、共通する基礎理論、近年急速に発展している統計科学の諸分野を体系的に学習する。

不確定な現象やランダム情報を取り扱う手段としてのデータ解析は、計算機科学・技術の発展に伴って近年脚光を浴び急速に発展している。データ科学に関連する分野では、統計的モデルを前提にした基本的な解析から、計算機に支援されたより広範囲なデータ構造などの解明までを取り扱っている。データ科学の多面性の一つとしての統計データ解析は、これまではデータを要約し記述する技術として発展してきた。本副専攻では、現象に対する科学的な認識並びに潜在的モデルの構築を数学的な表現などを用いて行い、データによる現象の解明を体系的に行うための基礎理論を効果的に研究・教育する。また、各学術分野固有の特徴を十分に活かした形でマルチメディア的な情報

に対し「調和の取れた数理科学的アプローチ並びにヒトにやさしい情報処理」を適応・発展させると共に、それぞれの学術分野に適合した新しい観点からデータ科学の研究・教育を行う。さらに、データ科学に関連する情報データ処理技術を活用して対象学術分野で生じる統計モデルの構築、データ構造の解明やデータ科学解析の観点から当該分野に本質的に貢献する。

（2）カリキュラム内容

本副専攻では、学部で統計の基礎コースを学習していない学生にも履修可能なように特別にデータ解析入門を用意しているので、学習意欲さえあれば誰でも専攻可能である。授業科目は主として次の諸分野に分かれ、その内容は以下の通りである。

- ・統計基礎理論：確率・統計解析基礎理論、モデル構築・選択論、多次元データ解析
- ・データ解析：バイオデータ解析法、画像解析法、大容量情報統計データの自動蓄積・探索・解析法（データ・マイニング）
- ・計算機統計：多様な統計情報を解析する技術の習得、開発、計算機シミュレーションに基づく統計基礎理論
- ・計量工学：理工学統計基礎、総合的品質管理、数量化理論
- ・実験計画：各種現象に対し統計モデルに基づいたデータ収集のための計画・解析・解釈
- ・現象解析：確率過程論、時系列解析法
- ・計量生物：生存解析、計量分析法、疫学的手法、ゲノム情報の分析法

（3）設置科目

[データ解析入門]

データ解析並びに統計学の基礎とその演習を行い、統計データ解析の基礎を習得させる。なお、受講者に対しては、情報統計やデータ科学の予備知識は仮定しない。(学部でデータ科学基礎科目を履修していない学生を対象のサービス講義)

[データ科学理論特論]

統計学の基礎理論、統計的推定・検定などの基礎を講義する。また、モデル選択、制約条件の下での推定・検定、決定理論などについても解説する。

[極値統計学特論]

レアイベントの事象生起に関する確率モデルの構成およびその極限分布の性質について講義する。また、金融工学、信頼性工学、環境工学における極値統計の利用の実例などについても解説する。

[実験計画法特論]

実験計画法での変量、因子、水準などの意味を具体例を通して理解させ、各種実験計画の特徴並びに分散分析を通じて実際の解析手法などを解説する。

[時空間モデル特論]

時間および空間中に発生するランダム現象を数学的に定式化するための基礎理論と、その統計データ解析への応用について解説する。定常過程、時系列モデルを主に講義する。

[非線形モデル特論]

カオスや複雑系について、確率モデルをベースに統計的視点から論ずる。カオスの基礎となる非線形モデルとして、ニューラルネットワークなどについても解説する。

[医学データ解析特論]

生命現象を対象にし、目的や対象に応じた資料の収集方法、解析方法を講義する。ヒトの成長過程の特徴付け、生物生産エネルギーなどの調査研究方法、分割表の解析法を解説する。

[多変量解析特論]

主成分分析、正準相関分析、判別分析、非線形多変量分析などの多次元データ解析の諸技法につ

いて、基礎理論並びに実質科学での分析事例などについて解説する。

[計算機集約型統計モデル特論]

パーミュテーションテスト、ブートストラップ法などの計算機指向型統計解析法を解説する。また、経験分布に関する基礎理論を基に、ノンパラメトリック法、セミパラメトリック法とそれらのロバスト性に関する解説も行う。

[データマイニング特論]

大容量情報統計データの自動的蓄積・探索・解析法(データ・マイニング)を解説する。データの自動蓄積・解析を効率よく行うためのデータの取り扱い方、AI的手法を用いたデータ自動解析法などを講義する。

[ビジネスデータ解析特論]

理工学や工業生産およびビジネスやファイナンスに関する諸分野からのデータを解析・制御する統計的手法、特に、理工学統計基礎、総合的品質管理などを講義する。計測技術および制御技術の進歩に伴い、歪んだ分布を前提とした統計的品質管理手法の適用場面が増加していることをふまえ、より効果的な方法の講義を行う。なお、方法を適用するに至る管理技術についても触れる。

[バイオインフォマティクス特論]

生命現象の解明に大きな役割を担うゲノム情報の解読によるゲノム進化と多様性の構造について、その方法論の基礎を概説し、統計的推定法の有効性について講義する。

[データ科学特別演習Ⅰ、Ⅱ]

[論文指導]。

(4) 開講に向けて

以上が大まかな「データ科学副専攻」の紹介であるが、本副専攻を成功させるためにはいくつかのハードルがある。学部を持たないために、数学専攻、経営システム専攻、情報工学専攻周辺の学生への開講となるが、主専攻の他にこの副専攻を取るようになるために、ロードがかなり増えるということとなる。講義内容の充実もさることながら、これを越えて履修する有能な学生を確保できるか

どうか成功のいかんが関わっているということである。

将来的にはデータ科学を本専攻として独り立ち

させたいわけであるが、これには、統計学会の皆様のおかげでいままざしと支援が必要である。この場を借りて一言お願い申し上げたい。

5.2 散布図と相関図

長坂健二（法政大学工学部）

中上健次は、1946年に和歌山県新宮市に生まれ、46歳で早世したいわゆる“破滅型作家”である。1946年は第二次世界大戦が終了した翌年であり、クリントン前アメリカ大統領（実は筆者も）生まれた年で、そのため中上健次は戦後生まれ初の芥川賞受賞者として知られている。

中上の遺稿集には、中上自らが書いた作品と主要登場人物の相関図（90年）が含まれている。中上の小説は、それぞれが複雑に絡み合っているもので、登場人物の関係を視覚的に把握できる相関図は、中上作品の理解に役に立つことであろう。^{*}

上演に4晩もかかる大作であるワーグナーの楽劇「ニーベルングの指輪」に於いては、ライトモチーフが大量に用いられ、たとえばある人物が登場するときには、その人物に対応するライトモチーフが演奏されることにより、観客に誰が登場したとか、誰について話が進んでいるかがわかるように設計されている。音楽的には、この工夫は優れたアイデアであるが、ライトモチーフが登場人物の関係までを説明するわけではない。「ニーベルングの指輪」の最初の全曲録音版の解説には、人物関係表があり、婚姻関係や血縁関係が図示されている。^{**}

呼び方は異なっているが、登場人物の関係を図で表した相関図に他ならない。相関図で取り上げられる関係は、血縁関係や婚姻関係だけではない。それらのためだけならば、家系図で十分であるが、恋愛関係、婚約関係、愛人関係等々は、芸能界相関図として週刊誌に登場することになる。

昔、アインシュタイン博士がノーベル賞を受賞した後来日され、全国各地で“相対性理論”について講演して歩いたそうである。講演会場には若

い女性がたくさんいたそうだが、相対性が男女お互いの関係、相性がよいかどうかについての理論と誤解して聴衆が集まったという話を聞いたことがある。この話が真実かどうかは知らないが、相関図は人間同士の関係を図式化したものと通常は考えられていると私は感じている。

手許の国語辞典には、“相関”、“相関関係”、“相関係数”などは載っているが、“相関図”はどれも記述がなかった。そこで、統計学辞典（編集委員代表：竹内啓、東洋経済新報社）を開いてみると、「散布図は相関図とも呼ばれる。」と記されている。同辞典によれば、「2変量からなるデータの表現法で、 x 、 y 軸からなる直交座標上に点をプロットしたものを2次元散布図（2 dimensional scatter diagram）、または、単に散布図という。」とあり、上で引用した文章に続いている。

さて、教育の現場ではどのように取り扱われているだろうか。大学や短期大学などでは、どの用語を用いるべきかと直接指示されるわけではないので、学習指導要領の変化を追うことにより、中学校や高等学校における状況を推測してみよう。

平成元年3月15日に改訂された中学校の学習指導要領 第2章 第3節 数学 の中で、第2各学年の目標及び内容 [第2学年] 2 内容C 数量関係 (3) エ 相関図と相関表の見方と記されている。ここでの相関図は散布図のことである。

学習指導要領（以降、原則として指導要領と略記することにする。）は、10年毎に改定されるのが原則であるから、上記の指導要領は現在中学校で教えられている、いわゆる新指導要領ではな

い。

新制高等学校は、昭和23年4月から全国いっせいに設けられ、そこでは昭和22年度制定の高等学校学習指導要領に従って教育が行われていた。“相関関係”は、昭和26年改訂の「一般数学」の科目に登場し、“相関関係・相関係数”は、昭和30年改訂の「数学Ⅰ」に登場している。高等学校学習指導要領は、昭和35年、昭和45年と改訂されているが、昭和45年の中学校学習指導要領では、“相関関係”は消えたと推理でき、昭和53年改訂の高等学校学習指導要領では、中学校で消えたままの相関関係は、「数学Ⅱ」、「確率・統計」でも扱われていない。***)

ところが、平成元年の改訂では、「数学C」に“相関図”、“相関係数”が登場し、最近の平成11年の改訂でも、「数学B」にそのまま残っており、「数学基礎」においても、実教出版を除いて“散布図”が扱われており、残りの4社中旺文社を除いて“相関図”の用語が登場している。旺文社版では、“相関関係”を“統計的な関係”と表現しており、適切ではない表現と私は考えている。****)

“相関関係”が中学校・高等学校において取り扱われてきたかについて指導要領を中心に振り返って来たが、“散布図”という用語ではなく“相関図”という違う概念で世の中では用いられている用語が、いかなる経過をたどって指導要領に入り込んだのかは、私には不思議に思える。

平成11年3月29日の、高等学校学習指導要領の改訂については、中央教育審議会の答申を受けて、教育課程審議会に諮問が行われ、その答申に基づいて改訂される。改訂の細部にわたっての作業には、学習指導要領解説作成協力者の方々も加わっているようであるが、確率論や統計学の専門家*****は一人も入っていない。私はたまたま上記委員の一人と面識があった関係で、新指導要領の統計(確率)分野について、色々と(非公式に)相談を受けた。また、確率の分野については、その委員の方は、高名な専門家の方に意見を伺っておられた。

「条件付確率」までを「数学A」で取り扱い、

“期待値”は“確率変数、確率分布”が導入される「数学C」に移動する方が学問的には自然な順序である」と、相談を受けた確率論の専門家と私の意見は一致したが、新指導要領に反映することはできなかった。

“相関図”の用語を“散布図”に変更する件について、私と相談を持ちかけられた委員との間では了解済みであり、一緒に編集にあたっている現在用いられている教科書には、最初に“相関図”と書き、続いて“散布図”とも言っていると断って、その後はすべて“散布図”を用いている。

このような経過があったために、上述の委員会で、今回の改定において指導要領から“相関図”の用語は消えて“散布図”に置き換わる予定というところまで行っていた。ところが、中学校で扱われている“相関図”が高等学校で教える内容として移動してくるために、“相関図”の用語が消えてしまうのは困るということで、そのまま残ってしまったのが実状である。

ここまで書いてから、大学での講義テキストや参考文献に挙げられるような書物では、“相関図”や“散布図”どのように取り扱われているかを手許にある本について調べてみた。

“相関図”と節の題名に書いて、並列的に“散布図”も記述しているのは、池田央著「統計的方法Ⅰ 基礎」77ページ、小寺平治著「新統計入門」である。

並列的に、“散布図”あるいは“相関図”と書かれていても、“散布図”が先に書かれていて、図自体には“散布図”のキャプションが付けられているのは、中村隆英・新家健精・美添泰人・豊田敬共著「統計入門」67ページ、篠崎信雄著「統計解析入門」57ページ、芝祐順・渡部洋共著「入試データの解析」53ページである。

主に“散布図”と用いているが、引用の関係で“相関図”が登場するのは、松原望著「わかりやすい統計学」77ページ、池田貞夫・西田英郎共著「社会の中の統計学」172ページである。

上述の松原氏により引用された、松下嘉米男著「統計入門」152ページには、“相関図”だけが用

いられている。同様に記述されている、鈴木義一郎著：教職数学シリーズ「教養統計学」92ページ、久志本茂著「教育のための基礎統計学」19ページ、岩井勇児・鈴木真雄共著「教師のための統計法入門」53ページについては、指導要領の影響かと想像しているが、本当のところはわからない。

日比野省三・中田友一共著「やさしいコンピュータ統計概論」120ページ、鳥居敏雄・高橋暁正・土肥一郎共著「医学・生物学のための推計学」89ページ、河田敬義・丸山文行・鍋谷清治共著「大学演習 数理統計」20ページ、宇喜田義昌・佐藤良人共著「例解 現代統計学入門」46ページ、杉山高一著「統計学入門」117ページ、野中敏雄・笹井敏夫共著「確率・統計の演習」40ページなども、“相関図”だけが用いられている。

今までは、“散布図”と“相関図”の2つの用語だけを問題にしてきたが、林知己夫編、林文・佐藤良一郎・青山博次郎・林知己夫共著「統計学の基本」36ページには、節の題名として“点図表”，本文では、「相関を示すから相関図表ということが出来るが、各観察値を点で示していることから点図表ともいわれている」と記述されている。これからは、“点図表”＝“散布図”＝“相関図”とされていた時代が有るのではないかと、想像がかきたてられた。福田治郎著「例解演習 応用統計入門」93ページ～には、節の題名として“相関図表”があり、2次元データが表の形で表されていて、そのデータを点の座標として“点図表”に表せばよいと説明されている。2次元データの表の“点図表は”相関の様相を示しているから、“点図表”を“相関図表 (correlation diagram)”，または、“散布図 (scatter diagram)”という。」と説明されている。

森田優三著「新統計概論」60ページ～では、“相関図”が節の題名であり、“散布図”に相当する図は、“点相関図”と記述されている。また、森田優三・久次智雄共著「演習 統計概論」40ページの問題文に、“点相関図”とある。

最後に挙げた3冊の著書から、“点図表”，“相関図表”，“点相関図”がいつのまにか統合されて

“相関図”となり、日常用語として最近の用法としては違う意味で用いられている“相関図”が、指導要領に“散布図”の意味で入って現在に至っているのではないかと予想している。

日常用語と異なる意味で学術用語が使われている例は当然あり得ることとは思いますが、“点図表”，“相関図表”，“点相関図”を用いるならばともかく、それから少し変わった“相関図”については、“散布図”と直したほうがよいと私は考え、この次の指導要領に反映すべく活動したいと思っている。

指導要領に“相関図”の用語が入り込んだ状況をご存知の方には、この場を借りてその間の事情をお教えくだされば大変有難く思います。また、私が当たった書物以外にも、“相関図”の記述があり、そのほうが正しいと主張される方がいらっしゃれば、ぜひその意見と根拠を伺いたいと考えております。

文中の著者名については、敬称を省略させていただきました。

*) 朝日新聞2000年4月2日 小山内伸氏の記事を参照した。

**) キングレコード株式会社制作、渡辺 護 監修「ニーベルングの指輪」〈ノート〉 1968 (非売品)

***) 昭和22年から昭和53年改訂までの指導要領に対応している高校や中学校で用いられた数学の教科書の現物を直接見ていないので、あくまでも指導要領に基づいた議論であり、不十分な論述である。

****) 現在市販されている高等学校の教科：数学の科目は、「数学Ⅰ」，「数学Ⅱ」，「数学基礎」だけであり、2学年以降に教えられる他の科目については、検定が終わったばかりがほとんどで、「数学Ⅲ」は、現在検定中あたりと思われる。したがって、内部資料（通称「白表紙本」）による議論には踏み込んでいない。また、中学校で扱われていた内容が、最近の指導要領の改訂により高等学校に上がってきた中で、統計に関する内容の行き先の1つが「数学基礎」であるために、数学基礎での“相関図”の取り扱いについて議論を展開している。

*****) その分野で研究活動を行っている人の意味で、専門家の用語を用いている。単に、確率論や統計学を講義している人をここでは専門家とはしていない。

6 研究部会最終活動報告

6.1 非線形時系列解析と金融工学II

谷口正信（大阪大学）

本研究部会は非線形時系列解析と金融工学の基礎勉強と、当分野への研究貢献をもくろんで平成12年11月より発足した。近年、国内外で金融工学に熱い視線がそそがれているが、我が国においては、数理統計学、理論的な時系列解析の研究者のこの分野への立ちあがり、遅いように思われる。非線形時系列の推定論等はいかほどの進展をみせ、現代的な統計的漸近理論のワクで捉えられてきている。一方、金融工学においては、基礎過程は代表的な時系列モデルで記述され、それに対して、オプションの価格評価、その他のリスク評価がなされているが、まだまだ統計的推定とセットになった理論展開になっていないように思われる。このような観点から、本研究部会では、非線形時系列解析の基礎部分の整理：ARCH, GARCH, TARモデル、拡散過程の統計的推定、および金融工学の諸概念の学習、またこれらの2分野に対するあらたな研究貢献をもくろんだ。何分これらの分野は極めて広汎な知識を必要とし、研究者が個別研究で把握できる範囲を超えていると思われ、このような研究部会でのお互いの情報交換が有益なものとなろう。以上の立場から本研究部会では研究部会談話会、他の研究者との研究交流を平成12年11月より、行い、種々の研究発表等を得た。おのおのの研究発表は必ずしも本研究課題に関係しなかったが、全体として極めて有益な研究情報を得て、各参加者も得られるところがあったと思われる。またメンバーの研究成果は大阪大学基礎工学部数理教室の統計プレプリントシリーズに発表された。

6.2 統計分野におけるインターネットの活用

森 裕一（岡山理科大学）

近年のパーソナルコンピュータとインターネットの普及により、統計分野においても、データの

開示を含む専門的知識の提供、オンラインの統計解析システム、インタラクティブな統計教育システム、アンケート調査・集計などに大いにインターネットが利用されるようになった。

このようにインターネットを活用することにより、統計分野における調査・研究・開発もこれまでになかった可能性が見られる反面、新たに解決しなければならない問題点も考えられる。そこで、それぞれの専門知識を有し、実際に活動を行っている日本統計学会内外の研究者が集まり、統計学の観点から計算機とインターネットのよりよい活用について検討することを目的に、本研究部会が2000年11月に発足した。具体的な目標として、次の3つを上げている。

1. 個々の研究者および研究グループが個別に行っている研究の結果を互いに共有する場を提供する。そして、可能ならば協力体制を確立し、より優れた、実用的なシステムを作成する。
2. 統計学の立場から有用な情報をインターネット上に提供するための、具体的な行動を起こす。現代では、社会からの要請に答え、専門的な情報を公開することは研究者や学会に課せられた使命のひとつである。
3. この分野における国際協力を推進する。

本研究部会は、2年間の研究期間が与えられているので、活動年ごとに、次のような研究方針を立てて臨んだ。

〔1年目〕

■ 1年の前半では、部会員の研究成果の発表を中心に研究交流を行う。

■ 1年の後半では、実際に統計関連のインタラクティブなサイトを構築し運営している研究者を講師に呼び、最新の技術の講習会を開く。

■ 1年間を通じて、関連する他の研究集会などへ積極的に参加したり、合同開催などを行ったりして、情報の収集にあたる。

■部会の研究成果をデータベース化するためと、それらを広く発信していく場として、部会のホームページを立ち上げる。

〔2年目〕

■1年の前半では、部会員の専門としない分野（インターネットを利用したマーケティングやアンケート調査に主眼を置いたもの）に関する講習会・講演会を開く。

■1年の後半は、2年間の活動成果のまとめを含んだ部会員の研究成果発表を行い、研究交流を行う。

■ホームページを継続的に充実させ、部会の活動を含めた情報発信の場としての完成を目指す。

上記の目標と方針に対して、次にあげる通り、1年目は5回の研究部会と日本統計学会69回大会での共通テーマセッション、2年目は、3回の研究会・講習会と統計関連学会連合大会での一般セッションによる研究交流を行った。また、部会のホームページも開設した。

開催研究部会一覧

【1年目】

■第1回研究会 2001年2月25日（月）15：30－17：30 北海道大学

■第2回研究会 2001年2月9日（金）15：30－17：00 岡山大学

■第3回研究会 2001年2月19日（月）－21日（水）ISM Symposium “Statistical software in the Internet age” 統計数理研究所

■第4回研究会 2001年6月26日（火）13：00－17：00 岡山理科大学（含Javaチュートリアル）

■第5回研究会 2001年7月13日（金）13：00－15：00 関西大学（含XMLチュートリアル含む）

■日本統計学会第69回大会共通テーマセッション 2001年9月1日－4日 西南学院大学

【2年目】

■第6回研究会 2001年12月21日（月）10：00－17：00 統計数理研究所

■第7回研究会 2002年3月28日（木）－29日（金）「統計データ解析エキスパートシステム

の構成法に関する研究（統計エキスパートシステム研究会と合同開催）統計数理研究所

■第8回研究会 2002年6月29日（土）11：00－16：30 統計数理研究所（含インターネット調査講演会）

■2002年度統計関連学会連合大会一般セッション 2002年9月7日（土）－9月10日（火） 明星大学

研究部会ホームページ

<http://www.sci.kagoshima-u.ac.jp/~jss/index.html>

総括

以上の通り、2年間計8回の研究会・講習会では、部会員の研究であるオンラインシステムやWebベースの統計教育の研究発表・討論と共に、JavaやXMLなどの最新技術の学習会、また、部会員の研究範疇ではなかったが興味のあるインターネット調査について、その専門分野の講師を招き講習会を行うなど、インターネットと統計をとりまく研究内容を幅広く研究することができた。また、1年目には国際交流も行うことができた。これらの発表資料で提供可能なものは、著者の了解を得て、ホームページにアップし、部会内外に情報が提供できるようにしている。これらの集大成的な意味で、2002年度統計関連学会連合大会では、部会員の発表7件を「情報処理・計算機科学（2）」の一般セッションで行うことができた。このセッションは本分野の関心の高さをうかがわせるほど聴衆が多く、その中で活発な討論ができた。

2年間の活動は、有意義であり、部会員自身の研究も大いに進んだと実感している。ひとえに、日本統計学会のサポートによるものと感謝し、本研究部会の活動を終えたい。なお、本研究部会は、その前身である「統計学におけるインターネットの利用研究部会」を引き継いだものであり、今後も大いに発展する分野と考える。継続的な研究も望まれるところである。

7 日本統計学会誌（和文誌）への投稿の呼びかけ

日本統計学会誌・和文誌担当理事
加納 悟（一橋大学経済研究所）

これまで日本統計学会会員の皆様の間では、日本統計学会誌（和文誌）について必ずしも大きな関心を持たれておらず、投稿も活発であったとは云えない状況にあります。和文誌編集の担当理事としては、雑誌の活性化の手立てとして2003年より次のような編集方針をとることに致しました。

（１）レフリーの審査期間を原則として投稿原稿の受け取りから2～3ヶ月以内へと短縮する。

（２）残念ながら掲載を却下（リジェクト）する論文に対しても、原則としてできるだけ建設的なコメントを加え、改善の方向を示す。

なお、ご承知のように大学院生の増加等の事情もあり、今後統計学に関係する分野でも博士取得者が増加すると思われます。博士論文の執筆条件や研究職の募集要項などではレフリーつき雑誌への掲載を掲げている大学も増えているようで、大学院の上級生にとっても限られた時間内で論文の

掲載が決まることも重要事項となりつつあります。

（３）各分野の先端研究の紹介や英文で発表された重要な研究の紹介、あるいは教育的な記事の掲載など幾つかの企画案を考慮中です。

この企画案はより多くの統計学会員が読者として掲載論文を見たいと思うような雑誌にする試みの一環です。

（４）日本における最も権威ある統計学和文誌をめざす。

また今後検討が必要ですが、できうる限り年2回の刊行をめざすつもりです。研究分野や論文の内容によっては英文よりはむしろ日本語で発表することのメリットが大きい場合も多いように思われます。統計学会会員の皆様及び指導中の院生には、是非ふるって投稿お願いいたします。また和文誌のあり方に関してご意見や提案を、会誌編集委員会や私までご連絡いただければ幸いです。

8 第4回IASC-ARS釜山大会に出席して

鈴木晶夫（北海道大学大学院経済学研究科）

The 4th Conference of the Asian Regional Section (ARS) of the International Association for Statistical Computing (IASC) が、平成14年12月5日から平成14年12月7日までの3日間（実質2日間）、韓国釜山市で開催されました。この会議のテーマは、「e-Statistics for Information Society」であり、Statistical Computingにおける新たな概念や最新の手法に関して、議論・情報交換を行うことを目的としていました。

会場となったのは、韓国釜山市海雲台にあるThe Westin Chosun Beach Hotelでした。韓国第二

の都市である港町釜山において、海雲台はその奥座敷といった感じの場所で、海雲台ビーチを取り囲むように、立派なホテルや娯楽施設が立ち並んでいました。今回会場となったホテルもそのなかの一つであり、講演会場からは海雲台ビーチを一望することができました。その美しさは、講演の行われている最中にも、思わず窓から外を眺めてしまうほどでした。これは私だけに限らず、講演中に外を眺めている方を時折見かけました。また、海雲台は天然温泉が出ることで有名であり、会議前後（時には会議中）の時間を利用して、それ

を楽しむこともできました。

12月5日に開会式が行われ、12月6日、7日の2日間に80件の講演が行われました。そのうちの8件が、Shun-ichi Amari先生（RIKEN Brain Science Institute, Japan）、Nick Fisher先生（VualeMetrics, Australia）、Junji Nakano先生（Institute of Statistical Mathematics, Japan）、Antony Unwin先生（University of Augsburg, Germany）、Zhi Geng先生（Peking University, China）、Wing K. Fung先生（Hong Kong University, China）、Sung-Hyun Park先生（Seoul national University, Korea）、Wolfgang Haerdle先生（Humbolt University, Germany）、Bernd Roenz先生（Humbolt University, Germany）による招待講演（講演時間約1時間）で、残りの72件が一般講演（講演時間約20分）でした。4つの会場が同時進行のかたちで行われたため、全ての講演を聴くことができなかったことは少し残念ではありましたが、大変興味深く感じる研究報告を多数聴くことができました。会場の中には、比較的大きな会議室と小さな会議室があり、セッションごとの聴衆の数にはばらつきが感

じられましたが、少人数のセッションにおいても活発な議論が行われていました。私は、Estimationのセッションで、競合危険モデルにおけるハザード関数の推定に関する研究報告を行いました。比較的少人数のセッションでしたが、今後の研究に大変有益なコメントを頂くことができました。

参加者は約200人で、その大半は、地元韓国の方々とわが国からの参加者でしたが、中国、タイ、フィリピン、ドイツ、アメリカ合衆国などからの参加者もありました。参加者の多くは、会場となったホテルに宿泊されていたため、講演会場外での議論・情報交換が可能であったことも実に有意義でした。また、私の暮らす北海道に比べるととても暖かい気候のなかで、美しいビーチを散歩し、美味しい海の幸とちょっぴり辛いキムチをいただき、気持ちよく温泉に入れたことも、この会議に参加してのよい思い出となりました。この大会の開催・運営にあたりご尽力くださった方々に、心から感謝いたします。

9 新刊紹介『情報をよむ統計学』

三浦由己

『情報をよむ統計学』という講座がこのほど朝倉書店から刊行された。著者は本学会会員の上田尚一先生である。先生は、日頃本学会統計教育委員会において、「情報の読み書き能力を身につけることを考えた統計教育を考えよ」との持論を開陳してこられたが、この講座はその持論を具体化された特色ある著作である。

講座は、次の9分冊からなるシリーズで、ここでは、2002年10月の統計教育委員会における先生の報告を中心にその概要と特色を紹介する。

講座の構成

1 統計学の基礎（既刊）

統計的な見方／情報の統計的表現、新しい表現

法／データの対比／有意性の検定／混同要因への対処 分布形の比較

2 統計学の論理（既刊）

データ解析の進め方／傾向線の求め方／2変数の関係の表わし方／主成分／傾向性と個性／集計データの利用／時間的変化をみるための指標／ストックとフロー／時間的変化の見方／

3 統計学の数理（既刊）

回帰分析／回帰分析の基本／分析の進め方／回帰分析の応用／集計データの利用／系列データの見方／時間的推移の分析／アウトライヤーへの対処／2変数の関係要約

4 統計の活用誤用

5 統計グラフ

- 6 質的データの解析
- 7 クラスタ分析
- 8 主成分分析
- 9 統計ソフトUEDAとその使い方（既刊）

『1：統計学の基礎』では、どんな観点で使うにしても必要とされる基礎事項について解説しているが、平均値の比較、平均値で考慮外とされる偏差、その大きさ（小ささ）を測る級内分散、基礎データが「同一条件でのくりかえし観察」によるものとみなせるなら「有意性検定」を適用できる、しかし、そうみなせない場合には、外れ値を検出する、あるいは、条件の違いを補正する「標準化平均値」を求める……こういうシラバス構成を採用し、その流れの中に、5数要約やボックスプロットを織り込んでいく。

次に、『2：統計学の論理』と『3：統計学の数理』では、「情報をよむ手法」を取り上げているが、2では、統計学の体系づけをフレキシブルに考え、たとえば「要因分析」など経済分析で広く使われている手法などを織り込むシラバス構成になっている。

よく使われている「回帰分析」については、その数理的な方法としての組立てを『3：統計学の数理』で詳細に説明している。

これらのシラバスは、「情報をよむ」場面が必要とされる手法、すなわち、「統計データ」と「統計手法」とを結びつけて、現象を説明する手法と位置づけて組立てている。したがって、「誰にとっても必要なりテラシイ」だとして、広範囲の読者を想定しているが、統計教育にあたる者に

とっても、いくつかの重要な注意を喚起する内容が含まれていることが注目される。

ひとつの、そうして、多分最も大きい問題点は、

扱うデータがDirtyであるのに

手法はCleanなデータを想定している

ことである。

社会現象を扱う場合、条件を制御して観察しにくいことから、程度に差はあるもののDirtyなデータを扱うことになる。したがって、まずデータをCleanにする手順が必要で、たとえば外れ値を検出するとか、条件の違いを「クロス集計表」を用意して識別するということである。

もうひとつは、「集計データの利用」である。

統計調査の結果や意識調査の結果を利用するときには、個別データを使う代わりに集計データを利用するが、その場合、たとえば回帰分析を適用するときに「観察単位数の差に応じたウェイトづけ」を考えよということ、あるいは、変数選択と共に観察単位の選択を考えよということである。

現実のデータを扱う場面では、大きい問題であるのかかわらず、既存の多くのテキストでは取り上げられていないことである。

どんな立場で統計教育にあたるにしても一読すべき内容を含んでいるという意味で、是非一読することを薦めたいと思う。

また、このシリーズには、学習用のソフトがCD-ROMで用意されている。学習用としてさまざまな配慮がなされており、豊富な実習用データベースが添付されている。

10 日本統計学会ロゴマーク募集のお知らせ

募集内容

日本統計学会では、学会のロゴマークを募集します。日本統計学会は、統計学の研究および普及を促進し、その発達に貢献することを目的としています。日本統計学会の英語名は Japan Statistical Society（略称、JSS）です。このロゴマークは日

本統計学会の会誌、封筒、レターヘッドなどに使われます。統計学をイメージしたシンプルで親しみやすく、学会名（JSSや日本統計学会）の入っているデザインが望まれます。学会会員以外の方の応募も歓迎いたしますので、お知り合いの方などに呼びかけをしていただきたくお願い申し上げます。

ます。

応募規定

- ・ A 4 版ケント紙または画用紙を使用。
- ・ 15×15cmの枠内に図案を描く。4×4cmに縮小しても使用可能なもの。
- ・ 彩色自由。ただし、白黒印刷でも映えるもの。
- ・ 作品裏面に簡単な説明文、住所、氏名、年齢、性別、職業、電話番号を明記。
- ・ 応募点数制限なし。ただし、1枚につき1点。
- ・ 未発表のオリジナル作品に限る。
- ・ 応募資格 不問
- ・ 賞 最優秀賞 1点5万円、優秀賞 数点1万円（受賞者が高校生以下の場合は相当額の図書

券)

著作権 入賞作品は日本統計学会に帰属する。

参 考 採用作品は使用の際、専門家による補作をする場合がある。

締 切 2003年3月31日（消印有効）

発 表 2003年9月、日本統計学会第71回総会で発表

応募先

〒106-8569 東京都港区南麻布4-6-7

統計数理研究所内

日本統計学会事務局

TEL 03-3442-5801, FAX 03-3442-5924

11 統計教育委員会からのお知らせ

渡辺美智子（統計教育委員会委員長）

平成14、15年度の統計教育委員会が発足しました。この委員会には、統計教育に関心のある会員の方ならどなたでも参加できます。これまで、1、2ヶ月に1回委員会を開催し、産業界で統計に携わっている方や、学校教育の現場で統計を教えている方などに来ていただき、ディスカッションを行ったり、あるいは、委員会内にワーキンググループを作り、小、中、高、大学での統計教育、あるいは社会人への統計教育のあり方等について検討を重ねてきました。

今期の委員会の活動方針は、まだ決まっていませんが、多くの会員の参加を得て、21世紀の統計教育に貢献できる委員会にしたいと考えております。関心のある方は、次までご連絡願います。

東洋大学経済学部

渡辺美智子

FAX：048-460-3190

E-mail：watanabe_michiko@nifty.com

12 日本統計学会会員用メーリングリストについて

情報担当理事 中野純司、幹事（情報）藤原文史

日本統計学会では会員の便宜をはかるために、会員用のメーリングリストを開設し、現在運用しております。

1. 投稿

投稿は本メーリングリストの登録者が自由に行えます。統計学会会員にとって有益であると思わ

れる投稿を歓迎いたします。また、理事会からもニュースやホームページ変更のお知らせなどを投稿いたします。

投稿は

kaiin@jss.gr.jp

にお願いします。すべての登録者にそのメールが配送されます。

2. メーリングリストの維持

a. 登録

会員は入会時に本メーリングリストに登録されます。なお、現在、すでに会員で会員名簿にアドレスの記載がない方やアドレスが古くなっている方は次項のアドレスの変更をお願いいたします。現在、本メーリングリストのメールが届いていない会員の方は会員名簿にアドレスが登録されていないと思われます。ぜひ、メールアドレスの登録

をお願いいたします。

b. アドレスの変更

メールアドレスを変更したい場合は、会員名簿の変更をお願いします。本メーリングリストは会員名簿にあるメールアドレスのみ利用できます。会員名簿の変更の連絡は

jimu@jss.gr.jp

をお願いします。

13 日本学術会議第19期会員候補者選挙延期のお知らせ

日本統計学会選挙管理委員

加藤 剛・金藤浩司

今年度は、日本統計学会が選定する日本学術会議第19期会員候補者の選挙の年です。この件につきましては、10月18日発行の日本統計学会会報(号外)で選挙公示を行い、選挙管理委員も準備を進めて参りました。ところが、「第19期日本学術会議会員推薦手続の延長について」と題する11月12日付の通知文書が、日本学術会議会員推薦管理会委員長から本会へ届きました。文書の要旨は次の通りです。

1. 現在、日本学術会議のあり方に関する検討が総合科学技術会議で行われており、11月11日付の「中間まとめ」報告書に、会員の選出方法の変更と第18期会員の任期延長が言及された。

2. 混乱を避けるため、日本学術会議会員推薦管理会は、第19期会員の選定手続等々の延期を決定した。

3. 選定手続等々の再開時期は未定。もし再開する場合には、決定次第、関係各機関へ連絡する。

この通知を受け、会長と理事長は協議の上、日本学術会議会員推薦管理会から選定手続再開の連絡があるまで、第19期会員候補者の選挙を延期することを決定いたしました。選挙再開を含めて、今後の展開についてはなるべく速やかにご連絡する予定ですので、目下の状況をご承知いただきますようお願いいたします。

14 韓国統計学会誌定期購読のお知らせ

日本統計学会と韓国統計学会は、お互いの欧文誌を特別価格(日本統計学会会員個人向2,500円/年)にて提供することになりました。国際交流にぜひ御利用ください。韓国統計学会誌(Journal of the Korean Statistical Society)は1年間で4号が発行され、1号あたり平均150ページというボリュームです。詳細は韓国統計学会ホームページ(<http://www.kss.or.kr/>)をご覧ください。

ご希望の方は、日本統計学会事務局まで氏名(または機関名)と郵送先をお送り下さい。折り返し振込用紙をお送りしますので、その振込用紙の学会誌という項目に韓国とお書き加えの上、所定の金額をお振込みください。なお、図書館等の機関向けには13,000円/年で提供させていただきます。

また、日本統計学会誌は、機関向けには9,450

円、年で提供していることも、合わせてお知らせさせていただきます。詳しくは事務局へお問い合わせ

ください。

15 2002・2003年度理事会議事録

2002・2003年度第1回理事会議事録

日時：2002年9月28日（土曜日）13：00～17：30

場所：統計数理研究所会議室

出席者：会長：杉山高一 理事長：国友直人

理事：久保川達也、加納悟、岩崎学、和合肇、山口和範、宿久洋、藤澤洋徳、南美穂子

前理事：小西貞則前理事長、北川源四郎、矢島美寛、広津千尋

<議題1>引き継ぎ事項について

〔会誌：欧文〕北川旧当理事より、資料に基づき、欧文誌第32巻第2号の発行準備中であること、第31巻から出版社をSciPress社に変更しLaTeX化したこと、その結果として海外販売促進活動のおかげで海外からの投稿が増加したこと等の報告があった。また、論文の投稿受付から採否の決定までの期間を短縮する一層の努力が必要であるとの説明があった。

〔会誌：和文〕矢島旧当理事が昨年から今年にかけての論文採択の状況を説明した。また今後、欧文誌との差別化を図るなど編集方針を再検討する必要があるとの説明があった。新編集委員会に対し、今後の方針を議論した上でその原案を理事会に提出するようにとの要望が出された。

〔大会企画〕連合大会について、欠席の田中旧当理事が作成・提出した申し送り資料をもとに岩崎当理事から報告があった。プログラム編成、大会関係の事務処理のやり方、セッションのあり方、総会の時間の設定などについては今後の検討が必要であるとの報告があった。また、新プログラム編成委員が紹介された。

<議題2>連合大会決算（案）報告

藤澤庶務会計担当理事が、資料に基づき、連合大会の決算報告（案）を説明した。報告集の残部があるので、購入希望者に販売する為に会報とホー

ムページに一文を掲載するよう要請があった。

<議題3>横断型基幹科学技術研究団体連合への参加問題

北川旧理事より、横断型基幹科学技術研究団体連合に関する内容の説明があった。意見交換を行った後、理事会として参加することを決定し、竹村渉外担当理事をこの件の窓口とした。

<議題4>大会運営の改善問題

藤澤庶務会計担当理事から、資料に基づき、大会時の会計の委託、他学会との連絡体制、開催校と事務局の役割分担、学生の参加費などを中心に、次回大会に向けて大会運営に関する改善の提案があった。また、欠席した柴田大会企画担当理事からもプログラム編成に関する意見が提出されたので意見交換を行った。今年度の連合大会連絡委員会、プログラム編成委員会等でさらに議論してもらうこととした。また、他学会と協力して学会誌を発行する案も連絡委員会等で検討してはどうかという意見が杉山会長から出された。今年度の連絡委員会の構成メンバーとしては、会長、理事長、大会企画・渉外・庶務は各1名程度でよいのではという意見が出され、各委員が会議に出席できないときには代理を出す方向で検討することにした。

<議題5>科学研究費申請の件

科学研究費申請の呼びかけを渉外担当理事が検討しkaiin@jss.gr.jp, stats@ism.ac.jpのメーリング・リスト等で配布することとした。

<議題6>日本経済学会連合代表の変更

日本経済学会連合の担当者を和合理事と加納理事に変更した。

<議題7>会計監事（候補）

会計監事として2名を候補に検討した。本人に承諾を得た上で、評議員会に推薦することにした。

<議題8>学術会議に対する優先順位

学術会議会員推薦委員会より依頼が来ている関連研究委員会の順位付けを、前回と同様に1. 統計学, 2. 経済統計学, 3. 情報学とした。

<議題9>広報からの報告

山口担当理事より会報No.113の目次案が報告された。また、会報をより充実する具体案を検討したいとのことであった。会報と和文誌の内容を統合してはとの意見も出された。差し当たっては会報編集のため、数名の幹事等を加えた広報委員会を作る案を山口担当理事が作成し、次回理事会で検討することとなった。

<議題10>その他

退会者の資料が回覧され、退会が承認された。

<議題11>次回理事会について

次回の理事会は、10月26日(土)12:00から開催することとした。

2002・2003年度第2回理事会議事録

日時:2002年10月26日(土)12:00~16:00

場所:統計数理研究所特別会議室

出席者:会長:杉山高一 理事長:国友直人

理事:赤平昌文, 岩崎学, 加納悟, 倉田博史, 久保川達也, 竹村彰通, 和合肇, 山口和範, 宿久洋, 南美穂子

<議題1>各理事からの報告

[会誌:欧文] 久保川担当理事より、資料に基づき新編集委員の名前が紹介され、投稿数の増加に伴い編集委員の数を増やしたこと、紹介された委員の他に韓国の学会誌と編集委員を2名ずつ互いに出しあう予定であり、さらに外国人編集委員を加える可能性が有ることの報告があった。欧文誌32巻第2号は12本掲載予定である。現在は16本審査中で、うち9本は日本、7本は海外からの投稿である。今後は特集を組み、ゲストエディターを頼んで招待論文なども載せるというようなことを検討しており、非会員の論文の掲載にページチャージをするということも検討したいとの報告があった。また、国友理事長より、今年度の雑誌の公開促進費は欧文誌のみで申請するとの報告があっ

た。

[会誌:和文] 加納担当理事より、前編集委員会から引き継いでいる論文が3本、新編集委員会になってから3本、計6本の論文が審査中であるという報告があり、学位論文などの投稿を積極的に働きかけたいとの説明があった。

[会報] 山口担当理事より、資料に基づき、会報No.113を発行したこと、No.114は編集準備中で1月に発行予定であることの報告があった。また、名誉会員や学会賞受賞者以外の会員に対する追悼文の掲載については、早めにメールで各理事に承認を得るということにした。会報編集委員会の構成、および幹事の任期について承認された。

[渉外] 赤平担当理事より、科学研究費の申請について広報に呼び掛けを掲載したとの報告があった。

[大会企画] 岩崎担当理事より、連合大会の企画のうち統計学会内で検討すべき問題に関して検討中で、特に、共通テーマや招待セッションの取り扱い、コンペを取り入れるという案、総会の時間などが問題点としてあがっているとの報告があった。

<議題2>評議員会議題

国友理事長より、11月9日に開催される評議員会の議題の説明があった。

<議題3>会員の除名

会費の滞納者に対して、できるだけ会費を納入してもらうようさらに働きかけるということで除名者の承認は先に延ばすこととした。

<議題4>ロゴマーク

杉山会長より、日本統計学会のロゴマークの作成について提案があった。条件を検討の上、1月の会報で公募するという案が了承された。

<議題5>賞の新設

杉山会長より、最優秀論文賞、Best Presentation賞(仮称)を新設するという提案があった。最優秀論文賞に関しては、新設する方向で検討を進めることとした。Best Presentation賞に関しては、新設するかどうかも含めて今後検討していくこととした。

<議題6>「統計の辞典」の刊行

杉山会長より、日本統計学会編纂による「統計の辞典」(仮称)の刊行の提案があった。刊行するかどうかは今後検討していくこととした。

<議題7>次回理事会について

次回の理事会は、12月21日(土)12:00から開催することとした。

16 会合案内

■会合案内

2003年4月

*4.1-4: 第4回独立成分分析国際会議 (ICA2003)

奈良県新公会堂

URL: <http://ica2003.jp/>

2003年7月

*7.7-10: INTERNATIONAL MEETING OF THE PSYCHOMETRIC SOCIETY (IMPS-2003)

Chia Laguna (CAGLIARI), ITALY

<http://www.imps2003.unina.it/>

*7.27-30: The 7th World Multiconference on Systemics, Cybernetics and Informatics

Orlando, Florida, USA

<http://www.iiiisci.org/sci2003/>

2003年8月

*8.13-20: The 54th ISI (International Statistical Institute) Session

Berlin, Germany

<http://www.isi-2003.de/>

サテライトミーティングも多数計画されています。詳しくは上記ホームページをご覧ください。

17 会報No.113の訂正とお詫び

前号の会報No.113におきまして次の2点について誤りがありました。関係の先生方や会員の皆様にご迷惑をおかけしました。お詫び申し上げますとともに、訂正したものを掲載いたします。

評議員選挙結果のお知らせにおいて、坂元慶行会員のお名前を誤って坂本慶行と記載してしまいました。

2002・2003年度評議員選挙結果

2002年7月24日、統計数理研究所において選挙管理委員、加藤剛、南美穂子の両氏により開票が行われました。その結果、定員規定により下記の40名が2002・2003年度の評議員に選出されました。

(なお、有権者1372名中、有効投票者数は143名、延べ記名数661、内有効661、無効0)

岩崎 学 氏家勝巳 大戸隆信 景山三平 勝浦

正樹 鎌倉稔成 北川源四郎 国友直人 栗原考次 西郷 浩 坂元慶行 佐藤 学 柴田里程 清水邦夫 清水雅彦 杉浦成昭 瀬尾 隆 田中 豊 田村義保 垂水共之 寺崎康博 道家映幸 富澤貞男 西井龍映 濱砂敬郎 樋口知之 広津 千尋 福井武弘 藤井光昭 藤澤洋徳 舟岡史雄 牧野都治 南美穂子 宮岡悦良 森 博美 柳川 堯 美添泰人 若木宏文 渡辺則生 渡辺美智子 (以上40名、50音順)

尾形良彦会員の統計学会賞受賞の言葉において、誤った原稿が記載されておりました。改めて正しい原稿をここに記載いたします。

受賞者のことば

尾形良彦

伝統ある日本統計学会より学会賞をいただき大

変光栄です。統計学の素人同然だった入会時以来、会員諸先輩同輩からは暖かいご指導お励まし御交誼を頂きました。お陰様で私の研究動機や士気が増幅・高揚され、根気強く研究を継続でき成果を積み重ねることができました。また、統計数理研究所の諸先輩同僚には、寛容に私の研究を尊重・支持して頂き、さらには機会あるごとに引き立て頂きました。流行にとらわれない地域主義的な研究気風のもと、国際交流も盛んな理想的な環境で、思う存分研究ができたのは幸運でした。改めて感謝いたします。

さて、統計的方法に関する専門家集団として結成された日本統計学会は早70年の歴史を迎えております。情報化社会と言われるなか各種データが爆発的に増加しています。当然ながら諸科学や情報工学の中で、統計的方法に対する需要が急増しています。しかし日本では、統計学の教育体制の後進性もあって、これに対応する統計科学者や技術者の数が追いつかない状況です。従って情報処理関連学会や応用科学の各学会で統計的解析ができる研究者が輩出せざるを得ません。とくに、これらの意欲的な研究者は、役に立つとあれば統計学の伝統的な成果から最先端の研究まで独学で取り込み、計算プログラムを作成して自分たちの問題に応用しています。そこで創意工夫された統計手法が、当該の学会で優れた成果として評価されている例が散見されます。私が関わっている地震学・地球物理学の学界でも、例えば大量の地震波

データやGPSなどの測地データから地殻断層の破壊過程などの逆問題に関して、大規模ベイズ法が当然のように工夫適用され、重要な科学的新知見が輩出しています。

実は、このような動きは統計科学に対してだけ起きている現象ではありません。21世紀には横断型科学が大きく発展すると言われ、新設既存を問わず互いの学会で守備領域が錯綜し、重複分野も大きくなってきています。このような時代においてこそ我々も、データの洪水に溢れる各科学分野や情報工学分野に打って出、単なる道具の提供や解析の手助けに留まらず、その分野での重要な課題は何かを深く理解し、あわよくば我々自身がその様な課題に取り組む気概が要請されているような気がします。この様にして統計的方法を創造的に発展させる努力を積み重ねる気風が漲るなら、日本統計学会の役割は重みを増し、その将来は誠に明るいと思います。今年の合同大会では、その様な方向を探るための会員の便宜を提供しようとする取り組みや交流が始められたように見えます。

私も10年も経ずに定年を迎えるような年齢にありますので、目標を絞って、地震の統計的予知・予報の実用化を実現する為の諸課題と切り結び、願わくは、後に続く研究の礎をつくりたいと思います。おわりに再び、このたびは私にとって節目となる大いなる励ましを頂き、受賞にご尽力下さった方々をはじめ会員の皆様に厚くお礼を申し上げます。

18 事務局から

投稿のお願いとお知らせ

統計学の発展に資するもの、会員に有益であると考えられるものなどについて原稿をお送りください。新刊の紹介なども歓迎いたします。

来日統計学者の紹介につきましては、訪問者の略歴、滞在期間、滞在先、世話人などをお寄せ下さい。さらに、求人案内（教員公募）なども受け付けております。また、修士論文・博士論文の紹介を行います。(1) 氏名、(2) 学位名、(3) 取得

大学名、(4) 論文タイトル、(5) 主査名（指導教員）、(6) 連絡先（e-mailアドレス）をお送り下さい。

できるだけe-mailによる投稿、もしくは、文書ファイル（テキスト形式）の送付をお願い致します。

原稿送付先

〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1

立教大学社会学部産業関係学科 山口和範宛

Tel : 03-3985-2325 (ダイヤルイン)

Fax : 03-3985-2833

E-mail : kaiho@jss.gr.jp

(統計学会広報連絡用e-mailアドレス)

統計関連学会連合大会報告集販売のお知らせ

2002年9月に明星大学で開催されました統計関連学会連合大会(第70回統計学会大会)の報告集を販売しております。送料込みで3000円の金額です。購入希望者は学会事務局にお問い合わせください。

訃報

次の方が逝去されました。謹んで追悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

清水 徹会員 (2002年6月25日)

平井聖司会員 (2002年8月24日)

森口繁一会員 (2002年10月2日)

奥野忠一 名誉会員 (2002年12月24日)

退会者

竹原明伸, 伊藤千尋, 岡田 靖, DUDEWICZ, EDWARD/J, 齊藤実, 小林正明, 宍戸雅宏, 米沢治文, 高橋宏一, 大谷俊輔, 伊藤繁, 金藤ふゆ子, 茂野洋志, 森山孝之, 高津順吉, 山田泰江, 山本正

日経Quick情報株式会社(賛助会員)

現在の会員数 (2003年1月1日現在)

名誉会員 25名

正会員 1334名

学生会員 187名

総計 1546名

賛助会員 21法人

団体会員 2団体

・統計関連学会ホームページURL:

<http://www.jss.gr.jp>

・住所変更連絡用e-mailアドレス:

jusho@jss.gr.jp

・広報連絡用e-mailアドレス:

kaiho@jss.gr.jp

・その他連絡用e-mailアドレス:

jimu@jss.gr.jp